欠けた月

karinomaki

はじめに

人は、ある時、体中の細胞が入れかわったような、そして、今まで見ていた景色が急に輝き出すような経験をします。それは、恋をしたときかもしれないし、夢がかなったときかもしれません。また、ずっと欲しかったものが手に入ったときかもしれません。その気持ちについて書いてみたいと思います。

忘己利他（もうこりた）

私は弱い人間であり、大切なものや人を守るということがずっとわかりませんでした。必要以上に執着したり、または思いどおりにならずに憎んだりしてしまういびつな人間でした。しかし、本当の愛情について教えてくれた人がいるのです。本当に大切に思うということは、大切に思いすぎて自分の思いどおりにすることではありませんでした。これは、自我が強すぎる状態で人を愛すると生じてしまうことであり、男女の愛にも、友人関係にも、親子にも言えることだと思います。「忘己利他」（もうこりた）と、その人は言いました。私よりも年配の、たくさんの経験をつんできたその人は、自分の我を捨てて人のために生きることの大切さを「忘己利他」と表現して、私に教えてくれました。私がその人と出会い、本当の愛情について気がつくまで、とても苦しかったのですが、その経験を聞いて下さい。

一度壊れたものが、結ばれる

その人と出会う何年も前のことです。私は心の中の大切なものが、大きな苦しみによって壊れて、景色がバラバラになった経験があります。そのあと、私はぬけがらのような日々を送ったのち、何かバラバラになったものをつないでくれるものはないか探し始めました。しかし、何年もそれは見つかりませんでした。先ほど、愛に「我」はあってはならないと書きました。しかし、それは少しだけ違うのです。何か愛するものや支えが欲しいと思う気持ちは「我」の一つであるからです。もし、「我」を否定する、「無我」の境地に達すると、その時はもうこの世をはなれ、天上の人となっているかもしれません。それは確かにお釈迦さまにはできたことかもしれません。しかし、何かを愛したい、支えになるようなものが欲しいという原動力がないと、人は本当に傷から立ち直ることが難しくなります。愛が最も傷をいやしてくれるものであるからです。この意味で、我や執着を私は肯定したいのです。

しかし、我も執着も、強すぎてはいけないのです。「忘己利他」の精神が大切なのです。
愛することの本当の意味を知ることが、壊れたものを結ぶ方法であるに違いないのですが、そのことに気がついたきっかけは何だったのでしょうか。
私は、バラバラになった心を、結ぶということについて考え、その人に出会う前の自分の過去を思い出してみました。私はどうやって、一度壊れたものを結んだのか、よく思い出してみました。

欠けた月

ある時私は、バラバラの心のまま、欠けた月を見ていました。そして、自分が大切なものを失っていることに気がついたのです。私は心に愛を失っているのだと。その時、欠けた月は数年ぶりにきれいに見えました。ずっと景色はバラバラだったのに。その時が、心を結ぶ方法に私が初めて気がついたきっかけだったのです。

失ったものに気がつくという、少し痛い思いが、心を結ぶ原点でした。月が欠けていたことがヒントだったのです。それは、空から神様が伝えてくださったものかもしれません。
心がバラバラになる前に、私はたくさんの過ちをおかしていました。大切に思っていた人が私を憎んでいると勝手に思いこみ、その人からはなれてしまったのです。そして、その人と二度と会えなくなってしまったのです。その人が私をどう思っていたのか今となってはもうわかりません。しかし、私は人を信じなくなり、誰も愛さなくなったまま孤独に生き、大切なものをずっとつくれませんでした。

大切なものをとりもどす

欠けた月を見たあとの私は、自分が失った大切なものは愛であると気がついていました。しかし、昔のような方法で人を愛してはいけないとわかっていました。昔のような執着だらけの心が、うまくいかない原因なのだとわかったのです。そんなとき、その人と出会い、人と人のきずなは、自分のために愛しすぎると「我」の延長になってしまうし、かといって自分の心を失っては、人のために動けない。「忘己利他」の精神が大切だとわかったのです。

哲学的に考えると、自分の心が愛を失って欠けていると気がつくことは大切です。それは痛いことかもしれません。自分が愛を失っていると、私も気がつきたくなかった。しかし、欠けた心が、マイナスとして、プラスを引き寄せるのです。私は自分の心を正しく見ることができたから、「忘己利他」の精神を教えてくれたその人に会えたと思っています。

自分を見つめる

どんなに痛くても、自分をしっかり見つめることから哲学は始まります。痛くてもいいのです。少し逃げながらでもいいのです。自分の根底に何があるのかをしっかり考えると、そこから生きる軸ができます。その軸があって初めて、ちゃんと人を愛することができるのだと思います。その軸は一つのきっかけによってできたりします。私にとって、欠けた月が一つのきっかけでした。心と自然はつながっているのかもしれません。自然の中に神様が存在するのなら、心は神様にもつながれるのかもしれませんね。自然は、心をしっかり見つめなさいといつも教えてくれているのかもしれません。生きる軸は、自分をしっかり見つめて心の中から大切なものを探ろうとすると、見つかるものです。その軸が、うまく執着をぬかれた愛ならば、それが世界を新しく、美しくぬりかえます。

愛と自我

哲学者のカントは、愛についてあまり書いていません。しかし、もし、生きる軸が愛でできているなら、カントは間違いなく哲学するという軸を愛し、しかし、その軸から、自我からどうしても生まれてくる毒をぬき続けた人だと思います。愛の軸は、それがつらぬいた時、体中の細胞が入れかわったような気持ちをもたらします。恋をして、急に景色が輝き出した経験をたくさんの人が知っていると思います。それは、自我の毒をぬかれて、本当の愛を知ったときの経験だと思うのです。

私は、昔大切に思っていた人を、私の心の弱さから憎み、心がバラバラになりましたが、それは私の愛の軸から自我の毒をぬく、大切な運命だったような気がします。一度壊れて毒をぬかれ、再び結ばれた時、人を愛する、大切に思うことはこんなに全てを輝かせるのだとわかりました。素晴らしい人々との縁は、私の自我の毒をきっとこれからもぬき続けてくれると思います。欠けた月は、私に本当の自分を教え、たくさんのプラスを呼び続けてくれていると今でも思い出すのです。「自分の痛みをしっかり見つめなさい」と、欠けた月は教えてくれたのです。それは痛いことでしたが、本当の幸せにつながっていました。本当の自分を見つめることが、愛の軸をつくりました。

補足

karinomakiのfc2ブログの「過去をステップにかえる方法」が、この文章の延長のような内容になっていますのでよかったら検索してみて下さいね
http://junsui87.blog.fc2.com/